

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：54502

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K13517

研究課題名(和文)工業高等専門学校における語彙学習のためのタスクベースカリキュラム開発と効果検証

研究課題名(英文)Task-based Curriculum for Vocabulary Learning at National Institute of Technology

研究代表者

山本 長紀(Yamamoto, Takenori)

神戸市立工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：80738443

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、まず語彙の長さや出現頻度の違いによって、語彙学習がどのように影響を受けるのかを明らかにした。高専生の語彙学習では、出現頻度が低い語彙学習について繰り返して学習すると、学習の成果が大きく現れることが明らかとなった。次に、語彙学習を行うタスクはどのようなものが適切かを探求するために、杉浦(2009)のニーズ分析と同じ調査を2高専で実施した。高専生も大学生と同様のニーズを持っているものの、高専のカリキュラムによってはニーズが異なることが明らかとなった。令和元年からは、新型コロナウイルス感染症の拡大により実践環境が制限され、研究計画を中断せざるを得なかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまで研究事例の少なかつた高専におけるタスクベースの語彙学習方法の開発を目的としていた。高専生の語彙学習や英語学習のニーズの現状を、大学生を対象とした研究の追試により明らかにしたことは、高専生を対象とした研究分野で初めてであると考えられる。新型コロナウイルス感染症の感染拡大によりタスクベースの語彙学習方法の提案と効果検証まで研究計画を進めることができなかつたため、今後の研究課題としたい。

研究成果の概要(英文)：In this study, we first clarified how vocabulary learning is affected by differences in vocabulary length and frequency. We found that the vocabulary learning of technical college students showed greater learning gains when vocabulary learning with lower frequency was repeated. Next, in order to explore what kind of vocabulary learning tasks are appropriate, we conducted the same survey as Sugiura's (2009) needs analysis at two technical colleges. It became clear that although technical college students have the same needs as university students, their needs differ depending on the curriculum of the technical college. From 2028, the research project had to be suspended due to restrictions on the practical environment caused by the spread of COVID-19.

研究分野：英語教育学

キーワード：高等専門学校 高専 語彙学習 タスクベース

1. 研究開始当初の背景

研究者が勤務する工業高等専門学校では、工学系英語語彙の学習指導を行っていた。語彙指導では、継続的で語彙の定着につながる効果的な学習を促進することが課題となっていた。本研究はこの課題を解決するため実践研究を行い成果を得たが(瀬川・山本, 2015, 2016; 瀬川・山本・岩崎, 2016)、指導法における改善点も明らかにした。そこで前述の実践研究で十分に行われなかったタスクを用いた語彙指導に着目し、タスクベースの語彙指導法を精査し、タスクベースカリキュラムを作成することとした。

2. 研究の目的と方法

本研究は工業高等専門学校における語彙学習を促進するタスクベースカリキュラム開発を目的とした。開始当初は次の手順でその目的を達成する計画だった。はじめに高専における語彙学習に適したタスクの理論的枠組を探求する。次に理論的枠組を基に実践的なタスクベース語彙指導法を作成する。その後実践研究によりタスクベースの語彙指導法の効果検証を行うことで、効果的なタスクベース語彙指導法を確立する。

3. 研究成果

高専における語彙学習に適したタスクの理論的枠組を探るべく、まずは高専生の語彙学習の実態について研究を行った。研究者の勤務校で行われている語彙学習指導が、高専生の語彙学習にどのような効果をもたらしているのかを問いとして、次のような研究を実施した。

瀬川・山本・岩崎(2017)では、研究者の勤務校における語彙学習を通して、高専生がどの程度語彙を学習しているか探った。勤務校では当時、一学年で開講されている3つの科目ごとに別々語彙を『COCET2600』から選定し、それぞれの科目担当者が語彙学習の指導を行っていた。この研究では、科目間で異なっていた学習する語彙を統一し、高専生が3つの科目それぞれで同じ語彙を繰り返し学習することにした。この研究では繰り返し行われる語彙学習を、学習効果を測るテストと高専生の学習状況を問うアンケート調査により明らかにしようとした。結果は、語彙学習の効果が表れ、またその学習方法自体を高専生が肯定的に捉えていたことが分かった。

瀬川・山本・岩崎・荒木・小澤(2018)では、瀬川・山本・岩崎(2017)での語彙指導を改めて実施し、語彙学習の効果が語彙の長さの違いによりどのように異なるかを探った。研究の結果、7文字以下の短い語彙の方が8文字以上の長い語彙よりも繰り返し学習する効果が大きく表れた。また山本・瀬川・岩崎(2019)では、同様の実践による語彙学習の効果が語彙の出現頻度の違いによりどのように現れるのか探った。その結果、繰り返し語彙を学習することは、出現頻度の高い語彙の学習では大きな効果が得られなかった。一方で、出現頻度の低い語彙の学習では、高専生が繰り返し語彙を学習することで、出現頻度の高い語彙と比較して大きな学習効果を得ることができた。

一連の研究により、研究者の勤務校の高専生については、繰り返し語彙を学習することの効果を探ることができた。しかし、高専生が具体的にどのような学習を行っているか、その学習がどのように語彙の定着に影響したかを明らかにしなければならないという課題が見つかった。その課題を踏まえて、タスクを設定して高専生に語彙を学習させることより、どのようなタスクに語彙学習の効果が現れるのかを探ることを次の研究の目的とした。

タスクの選定には高専生のニーズを知ることが必要である。高専生の言語学習におけるニーズを明らかにした研究は2件しかなかったため、そのうち1つを追試するという形でニーズアナリシスを行うこととした。山本・岩崎・瀬川(2020)では杉浦(2009)のニーズアナリシスを追試した。高専の1~3年生と4・5年生では異なるニーズがあること、また杉浦(2009)が調査対象とした高専生とは異なる高専生が対象だったにも関わらず同様のニーズがあることが明らかとなった。

研究ではこの後、高専生のニーズを明らかにする調査の更なる実施を通して、語彙学習のタスクの作成を予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染症の拡大により、調査や語彙指導の実践の場が大きく制限されてしまった。科研費の期間延長をしながら研究再開を試みたものの、上述した研究成果までで、研究計画を中断せざるを得なかった。

引用文献

- 瀬川直美・山本長紀・岩崎洋一(2017)「COCET2600を活用した語彙学習の実践報告-科目横断型学習における語彙定着の検証-」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』第36号, 135-143.
- 瀬川直美・山本長紀・岩崎洋一・荒木英彦・小澤健志(2018)「木更津高専における科目横断型語彙学習の効果-語彙の長さによる定着の違いに着目して-」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』第37号, 145-154.
- 山本長紀・岩崎洋一・瀬川直美(2020)「高専におけるTask-based Language Teaching実施のためのニーズアナリシス-杉浦(2009)の追試研究-」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』

第 39 号, 99-108.

山本長紀・瀬川直美・岩崎洋一(2019)「木更津高専における科目横断型語彙学習の効果-出現頻度による定着の違いに着目して-」『全国高等専門学校英語教育学会研究論集』第 38 号, 101-110.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 山本長紀・南侑樹・藤田卓郎・谷野圭亮	4. 巻 40
2. 論文標題 COCET研究論集第17号から第38号のシステムティックレビュー - 研究テーマ・研究分野・研究方法の動向 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 全国高等専門学校英語教育学会研究論集	6. 最初と最後の頁 147-156
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takumi Aoyama and Takenori Yamamoto	4. 巻 1
2. 論文標題 Equifinality Approach to Exploring the Learning Trajectories of Language Learners and Teachers	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Complexity Perspectives on Researching Language Learner and Teacher Psychology	6. 最初と最後の頁 152-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.21832/SAMPS03552	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 山本長紀・瀬川直美・岩崎洋一	4. 巻 39
2. 論文標題 高専におけるTask-based Language Teaching実施のためのニーズアナリシス - 杉浦（2009）の追試研究 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 全国高等専門学校英語教育学会研究論集	6. 最初と最後の頁 99-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山本長紀・瀬川直美・岩崎洋一	4. 巻 38
2. 論文標題 木更津高専における科目横断型語彙学習の効果-出現頻度による定着の違いに着目して-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 全国高等専門学校英語教育学会研究論集	6. 最初と最後の頁 101-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 瀬川直美・山本長紀・岩崎洋一・荒木英彦・小澤健志	4. 巻 37
2. 論文標題 木更津高専における科目横断学習の効果-語彙の長さによる定着の違いに着目して-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 全国高等専門学校英語教育学会研究論集	6. 最初と最後の頁 145-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 HONDA Katsuhisa, HOSHIKA Mami, AOYAMA Takumi, SOMEYA Fujishige, YAMAMOTO Takenori	4. 巻 32
2. 論文標題 A systematic review of articles in KATE 1-31: Changing trends in the field of English education	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 KATE Journal	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 金澤延美・山本長紀	4. 巻 51
2. 論文標題 ディクトグロスを用いた文法力に関する学習効果について-Pre-testとPost-testを用いて-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 駒沢女子短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 山本長紀・瀬川直美・岩崎洋一
2. 発表標題 高専におけるTask-based Language Teaching実施のためのニーズアナリシス - 杉浦 (2009) の追試研究 -
3. 学会等名 2019年度全国高等専門学校英語教育学会研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本長紀・瀬川直美・岩崎洋一
2. 発表標題 木更津高専における科目横断型語彙学習の効果：学年による定着の違いに着目して
3. 学会等名 全国高等専門学校英語教育学会第42回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 本田勝久・太田洋・山本長紀
2. 発表標題 小中連携によるリテラシー活動の効果：TEAを用いた英語教師へのインタビュー分析
3. 学会等名 第18回小学校英語教育学会（JES）長崎大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takenori YAMAMOTO, Takumi AOYAMA
2. 発表標題 Learners' perspectives on learning engineering vocabularies in KOSEN: Exploring their changes by quantitative content analysis
3. 学会等名 The International Conference on ESP, new technologies and digital learning (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山本長紀・瀬川直美・岩崎洋一
2. 発表標題 工業高等専門学校における科目横断型語彙学習の実践－語彙の長さによる繰り返し学習の効果検証－
3. 学会等名 関東甲信越英語教育学会第41回新潟研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 瀬川直美・山本長紀・岩崎洋一・荒木英彦・小澤健志
2. 発表標題 木更津高専における科目横断型語彙学習の効果－語彙の長さによる定着の違いに着目して－
3. 学会等名 平成29年度全国高等専門学校英語教育学会研究大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------